

# YNU

VOL. 191

YOKOHAMA National University  
Public Relations Magazine

横浜国立大学 広報誌

## 横浜国大の「国際性」

都市イノベーション学府・研究院 2011年4月開講



YNU Initiative for Global Arts & Sciences

# 横浜国大の「国際性」

YNU Initiative for Global Arts & Sciences

## ① 世界で活躍するYNU研究者

## ② YNUの環境リスクマネジメント

### Contents

#### 03 横浜国大の「国際性」

YNU Initiative for Global Arts & Sciences

##### ① 世界で活躍するYNU研究者

鈴木崇之 大学院工学研究院 准教授  
黒川清登 大学院環境情報研究院 特任教授

[INTERVIEW]

松行美帆子 大学院工学研究院 准教授

##### ② YNUの環境リスクマネジメント

[特別対談]

環境リスクマネジメント分野で  
世界をリードするYNU

松田裕之 大学院環境情報研究院 教授  
金子信博 大学院環境情報研究院 教授  
持田幸良 教育人間科学部地球環境課程 教授

#### 10 都市イノベーション学府・研究院 2011年4月開講

##### ① 都市イノベーション学府の誕生

[INTERVIEW]

梅本洋一 都市イノベーション学府・研究院設置準備委員長  
教育人間科学部マルチメディア文化課程 教授

[特別対談]

##### ② スタジオ教育を通して ビジョンを持った建築家を育成

山本理顕 大学院工学研究院 教授  
北山 恒 大学院工学研究院 教授

[研究室探訪]

16 長谷川秀樹  
教育人間科学部国際共生社会課程 准教授

小林正佳  
経営学部国際経営学科 教授

#### 18 Campus News

#### 19 主なメディア掲載情報(2010年7月-2010年12月)

※今回の表紙は横浜国立大学自然科学系総合研究棟II(建築学棟)  
外壁にツタとつる植物を取り混ぜたグリーンウォール(植栽)を施すなど、  
自然環境に配慮



環境保全  
黒川清登  
大学院環境情報研究院  
特任教授

ケニア  
ナイロビ大学

マダガスカル  
アンタナナリボ大学

タイ  
カセサート大学

マレーシア  
マレーシア科学大学

インドネシア  
ランブン大学



環境生態学  
松田裕之  
大学院環境情報研究院  
教授



### 海岸工学

鈴木崇之

大学院工学研究院 准教授

中国  
北京師範大学  
中国科学院生態環境科学研究センター

韓国  
ソウル市立大学  
延世大学

日本  
横浜国立大学

中国  
華東師範大学

フィリピン  
フィリピン大学



### 都市計画

松行美帆子

大学院工学研究院 准教授



### 植物生態学

持田幸良

教育人間科学部 教授



### 土壌生態学

金子信博

大学院環境情報研究院  
教授

環境問題が世界的な課題となって久くなっています。YNUはこの点に早くから対応するため、国内で初の環境に関する大学院を設置し、世界的にもリードしています。横浜という国際的な街に立地しているため、伝統的にグローバルな視点に立ち、総合的な学術の発展に挑み、社会への貢献を果たそうとしています。本号ではYNUの「国際性」による成果や未来への展望について紹介します。

# 環境・都市問題に取り組む YNU研究者たち

海岸工学、環境保全、そして都市計画、多様で多方向の研究によって世界とYNUの結びつきを創出する。新たな「国際性」の探求の一端がここにある。

## 海洋工学

### 美しく安心できる沿岸環境の実現に向けて

鈴木崇之 大学院工学研究院 准教授



茨城県波崎海岸



Takayuki Suzuki

1975年生まれ。博士(工学)。横浜国立大学大学院工学府博士課程後期修了後、オレゴン州立大学客員研究員、横浜国立大学非常勤教員、港湾空港技術研究所研究官、京都大学防災研究所助教を経て現職に。専門は海岸工学。

私

は海岸工学、特に沿岸域における波浪特性と漂砂の問題、砂浜の地形変化モデルの構築についての研究を行っています。“砂浜”に関しては、日本に限らず多くの国々で砂浜減少の問題が発生しています。その背景には、治水などによる海岸への土砂供給量の減少、海岸構造物による沿岸漂砂の阻止、海面上昇の影響などが挙げられます。

その一方で、特に都市部においては親水性を持たせた海岸護岸や人工海浜など、人々が海に接する機会は多くなってきていると思います。そのためにも、より美しい安心できる沿岸環境を構築していく必要があると考えています。砂の移動は、巻き上がった砂粒子が波や流れによって流されることによって生じ、視覚的に実感しやすい砂浜の問題に限らず、航路や港の埋没、生物への影響など様々な問題に関与しています。現在は、この砂の巻き上げメカニズムの解明やそのモデル化について室内実験データや現地観測データを用いて行っています。

このテーマ以外にも、波の音を用いての波浪の推定、海岸構造物に関する研究も行っており、また、津波や高潮などの沿岸災害から人々の暮らしや財産を守る研究もスタートさせています。

## 環境保全

### アフリカのマダガスカル環境問題に取り組む

黒川清登 大学院環境情報研究院 特任教授

JICAでの経済振興支援の経験を踏まえ、私の役割は、横浜国大のより実践的な環境問題への取り組みを途上国を中心に拡大することです。すでにマレーシア、インドネシア、タイ、フィリピン、ケニア、マダガスカルと双方向遠隔教育システムを設置し、連携講座を開講中です。また同時に、環境リーダー育成という院生を対象とした実践的英語プログラムを担当しています。

近年の途上国支援は、従来の道路・ダム建設等のハード重視型から人材育成、雇用機会の創出、生物多様性保護等のソフト重視の複合型に変貌しており、大学の役割はますます重要になっています。例えば、大学が農民とともに農村の経済振興のために農産品開発を行う、エコツーリズムの研修を提供するなど、途上国の大学のほうが、実は日本の大学よりも国際化が進んでいる側面もあります。

私に取り組んでいるマダガスカルの大学との関係強化は、横浜国大にとっても重要な意味があると考えています。マダガスカルは生物多様性の宝庫でありながら、貧困のため森林が伐採され、絶滅の危機に瀕している生物も少なくありません。彼らにとって、横浜国大は日本で唯一の連携協定締結大学であり、今後どのように協力していけるか期待されています。



エリマキツネザルはマダガスカルだけに生息するサル。ユニークな姿と飼育のしやすさでペットとして人気が高く密猟の対象となり、不法伐採による森林の現象も加え、絶滅が心配されるほど数が減っている



Kiyoto Kurokawa

1957年生まれ。筑波大学社会学類卒業後、三井銀行、JICAを経て2010年7月から現職。これまでの渡航先は途上国を中心に88カ国に及ぶ。

## 【Interview】

## 都市計画

## これからの日本がアジア、世界のまちづくりのモデルに

松行美帆子 大学院工学研究院 准教授

聞き手／広報・渉外室

理系と文系が融合した都市イノベーション学府の誕生にあたり着任された松行准教授。文理の融合、さらにフィールドワークで培った経験値と机上の理論の融合により、ますます深みを増す研究への期待を伺いました。

## 文理の学部の垣根を越えて 都市研究はフィールドワーク

—— 研究テーマを教えてください。

私の専門は都市計画、まちづくりです。特に、日本やアジア（タイ）と、ヨーロッパ（イギリス・オランダ）を研究してきました。これまでの都市計画といえば行政主導でしたが、現在は市民やNGO、民間企業も積極的に関わっています。双方の合意の形成や、透明性ある計画づくりや制度についての研究をしています。



左：タイ・バンコクのスラム街 右：タイ・バンコクの昔ながらのマーケット

—— 具体的にどんな制度がありますか？

例えば、環境アセスメント（EIA※）の制度です。ある事業が周囲に与えるインパクト（影響）を事前に予測・評価して環境汚染を未然に防止するための制度ですが、ダム建設など、明らかに環境や地域住民に多大なインパクトを与える事業には不可欠の調査です。ところが、評価が出る時にはもはや事業はストップできない段階に至っているケースが多く見られます。もっと早い段階でなければ意味がありません。そのことから、主に欧米で制度化されている戦略的環境アセスメントを研究し、日本やアジアの都市計画やまちづくりに活かしたいと考えています。

戦略的環境アセスメントは、より早い段階で環境面、社会面、経済面という、三つの違う観点でその影響を検討するものです。欧米の制度を、文化や歴史の異なるアジアにそのまま持ち込むことはできませんから、アジアの特質にふさわしい形にして活用していくことが目標です。

—— アジアに興味を持った理由は？

もともと、アジアの都市の喧騒とした独特の雰囲気やエネルギーな雰囲気に惹かれ、大学院博士課程で1年間タイに留学しました。

アジアの都市はご飯もとても美味しく、非常に魅力的です。でも、同時に問題も非常に多い。非衛生的で、居住環境の悪いスラムがあり、貧富の差も激しく、非常に脆弱です。深刻な環境汚染の打撃を一番受けるのは貧しい人々です。その実情を目の当たりにした時、都市計画で少なからず貢献が出来ないかと考えました。

もう一点、以前は東京とアメリカの一部だけだった巨大都市が、アジアで急増していることも見逃せません。人口1千万人以上のメガシティが地球に与えるインパクトは多大です。マクロな地球レベルの問題と、ミクロな地域・地区レベルの問題、双方から取り組む必要があります。

—— 日本の都市はどうですか？

都市を語る時には持続可能性というものがある外せませんが、日本の都市の場合、人口の安定が持続可能性の指標の一つだと思うのです。少子化が進んで人口が減少するとさまざまな問題が現われます。例えば、住宅地では空き家が増え、防犯面で不安です。インフラの供給も非効率になるでしょう。出生率を維持して人口を安定させる政策がどのようなものか検討を深める必要があります。

—— 巨大化するアジアに対し、日本は高齢化

し人口減少が進んでいますが、逆行しているということなのでしょうか？

実はアジア各国でも少子化は始まっています。日本はあらゆる意味でアジアの先駆けなので、成功面も失敗面でも、我が日本の経験はアジアの、ひいては世界全体の参考になると思います。高齢社会は成熟社会ととらえ、余暇と専門知識を持つ高齢者がどんどんまちづくりに参加していくという、よい面も見ることが出来ます。日本がどのように成熟したまちを作っていくかは、アジアや世界のまちづくりのモデルになっていくと思います。

—— YNUの学生にメッセージをお願いします。

横浜は昔からまちづくりに関しては先進的ということもあり、興味を持っていました。都市の研究は本当におもしろく、土木や建築だけでなく、社会や経済などあらゆる観点から関わることが出来ます。「都市」を研究することは「人」を研究すること。学生の皆さんには、とにかくまちに出て、自分の足で歩き、目で見、肌感じてほしい。そして教室に戻って理論を学び、肌での経験値と理論とをミックスした自分独自の視点を養ってほしいと思います。

※EIA=Environmental Impact Assessmentの略



Mihoko Matsuyuki

1974年生まれ。東京大学工学部都市工学科卒業。同大学院工学系研究科都市工学専攻博士課程修了。東京大学特任助教、同特任准教授を経て、2010年10月から現職に。

「都市」を研究することは、  
「人」を研究すること。  
自分独自の視点を養ってほしい



【特別対談】

# 環境リスクマネジメント分野で 世界をリードするYNU

環境リスクマネジメント分野における国内屈指の教育研究拠点として、リーダーとなる人材を輩出し続けるYNU。

国の重点プロジェクトを支える松田裕之先生、金子信博先生、持田幸良先生に、幅広い研究の系譜と、科学的かつしなやかな視野で捉える「環境リスク」について伺いました。

聞き手：広報・渉外室

## 多岐にわたる分野の専門的視点で トータルに見据える 「環境リスク」とは

— はじめに、YNUが取り組んでいる「環境リスク」について教えてください。

**松田** 環境問題には、水俣病のように有害物質を人間が摂取して人体に深刻な影響を与える公害問題があります。もっと低い濃度で有害物を摂取し、何万人に何人という割合で健康を害するものは健康リスクです。昨年名古屋で生物多様性条約について議論されましたが、生き物が絶滅してしまうような危険性を生態リスクといいます。環境リスクとは、この2つが中心です。リスクという言葉は、本当に悪くなるのかどう

かはわからないという危険性、つまり確率なのです。起こるかもしれないし起こらないかもしれないが、起こってからでは遅すぎる。私たちはそのリスクを計算し、それをどうやって減らせばよいかということを研究しています。

— 私たち市民のリスク感覚は、報道などで見聞きする情報に左右されがちです。

**松田** 自然界においては、生物が死ぬということとは当たり前ですし、絶対に安全などということはいえません。魚から摂取される有害物質ダイオキシンは、一時期その危険性をさかんに取り上げられましたが、実際に普通に食べたらのぐらいの人がガンにかかるのか、ひよっとしたら10万人に1人も知れないというごく少ないリ

スクを問題にしています。汚染されているならば、魚を食べない方がよいのか、しかし、健康食品である魚を食べた方が寿命は延びるかも知れません。ダイオキシンの害と、不飽和脂肪酸としての魚の利益のそれぞれを計算しなければならないのです。1つのリスクを減らすと別のリスクが生まれるというのは良くあることです。私たちはリスクをゼロにできるとは思っていませんが、できるだけ減らそうとしています。

— そのために、重要視されていることは？

**松田** トータルに見るとということです。電気自動車は運転時にCO<sup>2</sup>が出ない点は環境への負荷が少ないといえますが、製造時にはCO<sup>2</sup>を出すし、発電も風力や太陽熱などではなく石油や



松田裕之

大学院環境情報研究院 教授

金子信博

大学院環境情報研究院 教授

持田幸良

教育人間科学部地球環境課程 教授



Hiroyuki Matsuda  
大学院環境情報研究院  
(自然環境と情報部門/  
専門: 環境生態学)

1957年生まれ。理学博士、日本医科大学助手、水産庁中央水産研究所主任研究官、九州大学理学部助教授、東京大学海洋研究所助教授を経て2003年より現職に。主な訳書に「つきあひ方の科学」(ミネルヴァ書房)、著書に「共生」とは何か」(現代書館)、「環境生態学序説」、「ゼロからわかる生態学」、「生態リスク学入門」(以上共立出版)など。生態学会次期会長。



Nobuhiro Kaneko  
大学院環境情報研究院  
(自然環境と情報部門/  
専門: 土壌生態学)

1959年生まれ。農学博士。島根大学助手、助教授、横浜国立大学助教授を経て、2001年より現職に。土壌生物の多様性と機能を研究している。著書に「土壌生態学入門」、訳書に「生物多様な星の作り方」(いずれも東海大学出版会)など。



Yukira Mochida  
教育人間科学部  
(地球環境課程自然環境  
講座/専門: 植物生態学)

1950年生まれ。理学博士。東北大学助手、横浜国立大学助教授を経て、2001年より現職に。熱帯から極地に至るまでの多様な植物群落とその生育立地の解析と保全に取組んでいる。1986～88年には南極地域観測隊生物担当として越冬した。著書に「環境教育—基礎と実践—」共著(共立出版)など。

石炭、天然ガスを燃やすのであればCO<sub>2</sub>を出します。環境への負荷はトータルに考えることが大事です。YNUのリスクマネジメント専攻には、生態学者もいれば環境毒性学者、法律学者もいます。そこが強みです。

— YNUの環境研究の系譜や、各先生の研究分野についてもご紹介下さい。

**持田** 私がYNUに入学した翌年ですが、1973年に私の師である植生の宮脇昭先生が土壌動物の青木淳一先生や安全工学の北川徹三先生と環境科学研究センター(※1)を立ち上げました。スタッフには奥田重俊先生、藤原一繪先生、現学長の鈴木邦雄先生、原田洋先生がいました。私は卒業後東北大に20年ほどお世話になってYNUに戻ってきたのですが、植物群落(※2)がどのような環境のもとに成立しているのか、生えている場所の土壌や地形を解明する植物生態学を研究しています。

本場ドイツのチュクセン教授のもとで学んだ宮脇先生は、人間や生き物の生存基盤は植生や緑であり、土地にあった植物を植えることによって人間が生存できる。また、緑を食い尽くしたことによって文明は滅びているというのが持論です。宮脇流に言わせれば鉄とコンクリートのギリシャ・ローマに始まり、都市化の結果として緑を食い尽くし、人工物に置き換え、最終的には文明が滅びたのだと。ヨーロッパも産業革命以降、石炭石油を使うようになり収奪、資源を食い尽くすことによって、持続可能な発展ができなくなる。リスクとも通じるものがあります。人間が生きていくためには工業化も避けられませんが、そのなかでいかに緑を還元するか。企業や自治体とともに環境保全林、緑を創造し、世界中で3000万本の植林をしています。CO<sub>2</sub>を吸収して酸素を出してくれる緑を増やすことによって、生存基盤を確保するという考えです。それは、リ

スク以前に人間や生物が生きていくために不可欠なのです。

**金子** 土の中には、ミミズのような動物がいますが、1960年代に地球全体でどのぐらいいるかを調査したときに、日本は植物や土の中にいる動物の研究で世界をリードする成果を出しました。そのときのリーダーの1人が、私の恩師・青木淳一先生で、宮脇先生が環境科学研究センターを作るときに招きました。青木先生は土壌動物の分類学を飛躍的に発展させ、ササラダニという動物の新種を、1人で400種近く見つけています。土壌動物を専門に研究しているのは、今でもYNUだけなのです。

森林には肥料をやらなくても植物が育つのですが、そのスピードを測ると畑と変わらないどころか森林の方が効率が良い。人間がいくら頑張っても森林の生産力には勝てないのです。しかもその土壌は悪くなることがない、人の手が加わらない限り持続可能です。

— ということは、農耕とはある意味自然破壊なのでしょうか。

**金子** そのとおりです。古代文明が滅びたのは、戦争や民族の移動もあるのですが、ほぼ共通してみられるのは、土壌が悪くなって農耕が継続できなくなって滅びたといわれています。多種多様な動物が微生物と関わって植物に必要な栄養分を受け渡しているのが自然のシステムで、農業で人が何かをするとその仕組みが壊れてしまうのです。森林をヒントに、不耕起栽培で畑の作物や米を生産している農家の方がいますが、耕さず雑草とも共存させるといふ農業は生態学的に説明がつき、計算すると養分の収支が合っています。このような土は生物多様性の宝庫で、多岐にわたる生態学的な現象が同時に生じています。しかし、現実の農業の研究者は袋小路

に入っていて、たとえば温暖化によりイネの花粉がうまく形成されない、というような細かな研究しかしておらず、広がりがありません。西洋医学の対処療法のようなものです。

— 今までの農業とはずいぶん違いますが、いろいろと考えさせられます。

**松田** 宮脇・青木両先生とは違って、東京大学での研究が長かった中西準子先生の専門分野は下水道や汚水処理の研究です。行政にも積極的な提言も行っていました。YNUの環境科学研究センター教授に就任したのは1995年で、本学ではダイオキシンの研究に打ち込まれました。ダイオキシンが問題になった頃、団地や学校の焼却炉はすべて撤去されましたが、中西先生は実際に私たちが摂取しているダイオキシン類はどこから来ているのかを細密に分析、ほとんどは昔の農薬であるという最も大きな原因を明らかにしたのです。どのぐらいに危ないのかということを見極めないと、環境問題はブームみたいに取り上げられ、やがてはタブーになる。そういうことを避けたいというのが、YNUの環境リスクの取り組みです。そのとき、健康リスクだけでなく生態リスクも扱わなくてはならないと考えた中西先生が、九州大学で生態学を研究していた私に声をかけてくれたのが出会いです。彼女の科学者としての姿勢は徹底していて、ファクト(事実)を積み上げて、その中から言うことを探す。環境問題は、得てして事実よりも論理が先走りがちですが、彼女は事実に基づかない議論は避けたいのです。

宮脇先生、青木先生、中西先生に共通しているのは、このままでは文明が壊れるかも知れないという危惧。そして、「リスクはある、それをほどほどに減らしていくのが大事」というスタンスです。センセーショナルに取り上げたあとは忘れてしまうのではなく、ぶれない取



り組みです。分かりやすく伝えるのは大事ですが、極端に伝えるのは問題です。

環境問題は予防原則、つまり悲観的に見がちであり、不確かなものであればあるほど、大げさに取り上げられます。しかし、野外に出てみると、亜鉛の濃度が環境基準の10倍というところがいくつもあります。さすがに敏感な生き物はいませんが、2倍のところなら普通に生息しています。野外で実証しながら環境基準の妥当性を見ていくことは不可欠です。

半世紀前には絶滅が心配されたほど減ったシカも現在は増えています。しかし、保護してきた人の頭の中はすぐには切り替わりません。私たちはリスクの専門家ですから、増えすぎれば捕ることを提言しますし、捕るとどのぐらいいるのかもわかります。

## 環境リスクマネジメントの国際拠点として取り組むGCOEプログラム、およびJSTプログラム<sup>(※3)</sup>とは

— YNUが取り組むGCOEプログラム、JSTプログラムについてもお聞かせいただけますか。

**金子** 2つのプログラムについて簡単に紹介すると、その前段にあたるのが2002年に文部科学省

が我が国の各分野における教育研究拠点として選定した、いわば「21世紀における日本を代表する大学の研究」である21世紀COEプログラムです。その最初の募集に本学からは2つのプログラムが採択され、その1つが環境情報研究院の浦野紘平先生をリーダーとする「生物・生態環境リスクマネジメント」です。

グローバルCOEプログラム(GCOEプログラム)は、2007年により国際的な教育研究拠点として募集されたもので、松田先生をリーダーとする「アジア視点の国際生態リスクマネジメント」(図1)と、工学からの2件が採用されました。21世紀COE終了時に、続けてグローバルCOEに選ばれたところは全国でも非常に少なく、2つのCOEを獲得して成果を出したことから、「環境リスク学といえはYNU」という国内での位置づけが定まってきました。その大きな特長が「アジア視点」なのです。

**松田** 環境問題は、欧米の考え方が中心に論じられますが、キリスト教という一神教の価値観だけが世界の価値観ではありません。また、法規制だけが自然を守る手段ではなく、人や企業をその気にさせることです。…人間生活に有益で、かつ安全性が未実証の問題について、いろいろな価値観の軸をもちながら「ほどほど」の解を地域と共に探すことが、私たちのアジア視点です。

10年たつと世の中の考えはずいぶん変わります。かつて日本人はうさぎ小屋に住んで金儲けをしていると言われましたが、エコロジカルフットプリント、つまりどれだけ人間が環境に負荷をかけているかを考えると、家は小さい方がいいわけです。頭の中だけで環境問題を理論づけたり、1つの思想で全部を割り切ったりするのはなく、いろんな価値観の軸を持ちながら考えていくのです。

**持田** 「多民族で多種多様な考え方があって画一的ではない、いろいろなものを含んでいて、自然との共生が今まで上手くいっていた」というのがアジア視点ではないかと思います。東南アジアの仏教国は非常に穏やかでおおらかですね。水田耕作の伝統があるので、自然を食い尽くさない。経済最優先で突っ走るのではなく、欧米とは違う共通の価値観が出てくれば、アジアは生き残っていけるのではないかと思います。多くの人口を抱えているので、そのリスクも考えなければなりません。

**金子** JSTプログラム「リスク共生型環境リーダー育成」(図2)では、世界をフィールドに活躍できる環境人材の育成に力を注いでいます。先ほどの松田先生の話にも出ましたが、リスクはゼロにはできないものですから、あえて共生<sup>(※4)</sup>

## YNU環境リスクマネジメントの礎を築いた3名の研究者

**宮脇 昭**  
Akira Miyawaki

1928年生まれ。理学博士、横浜国立大学名誉教授。土地本来の植生を徹底的に調査して本物の森を再生する「宮脇方式」を提唱し、国内外から高い評価を受ける。2006年、地球環境分野で世界的に権威のあるブルーネット賞を受賞。(日本人初受賞)

**青木 淳一**  
Junichi Aoki

1935年生まれ。農学博士、横浜国立大学名誉教授。300種以上のダニの新種を発見するとともに、土壤生物を指標に用いた定量的な環境評価法を確立する。2001年、博物学分野で顕著な業績のあった研究者に贈られる南方熊楠賞を受賞。

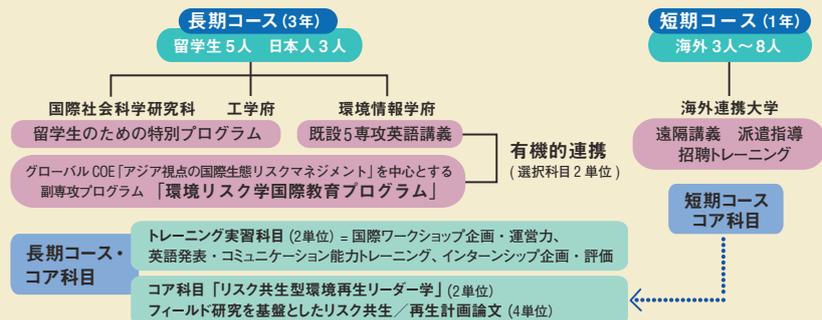
**中西 準子**  
Junko Nakanishi

1938年生まれ。工学博士、横浜国立大学名誉教授。いたずらに危険性を騒ぎ立てることのない定量的な化学物質のリスク評価手法を確立し、環境リスク学という新しい学問分野を日本で切り開く。2010年、国の文化功労者に選定される。

図2/JSTプログラム「リスク共生型環境再生リーダー育成」 <http://www.re-lead.ynu.ac.jp>

本プログラムは、文部科学省の「戦略的環境リーダー育成拠点形成」の事業であり、アジア・アフリカ地域における生態リスクと環境被害の拡大に対応するために、生態環境リスク研究に実績のある環境情報学府の学問体系とグローバルCOEの成果を連携させ、即戦力として環境問題の解決に寄与する人材育成を目指している。その問題解決に当たっては、リスクを単に低減させるのではなく、経済発展と生態リスクとのトレードオフを重視する「リスク共生」という新しい生態リスクマネジメントの手法と実践を提案している。双方向遠隔講義システムを駆使し、フィリピン、タイ、マレーシア、インドネシア、ケニア、マダガスカルの大学と授業を共有し、学生の派遣、招聘を行って環境リーダーを育成している。

カリキュラムと教育体制



というキャッチフレーズで環境問題に対する私たちの立場を表現していこうというわけです。

実際には留学生を含む博士課程の学生を募集し、海外に連携の大学を作って、その先生にも授業をしていただく。本学の学生は、フィールドワークを主に海外で行っています。環境に関連するのは、生態リスクに限らずインフラ分野や、汚染物質を研究している化学の学生もいて、広く環境リスクを捉えて発展するよう議論しています。連携大学とは、インターネットでの遠隔授業を行っています。海外の大学では、通信回線の状況もありいいとは言えませんが、それを克服しハイビジョン画質で行っています。鮮明でライブ感があり、大人数でも議論できるシステムを作りました。パワーポイントの資料を別画面に映し、双方向でポイントできるシステムでフィリピン・タイ・マレーシア・インドネシア・ケニア・マダガスカル6大学を結んでいます。英語での議論が弾み、短期間できちんと応えるのは大変ではありますが、学生たちにとっても良いトレーニングになります。

今年2月には、各大学から選抜された優秀な学生が1名ずつYNUに集まり、短期プログラムでの研修会を行い、YNUの学生とも交流しました。すると、それまで気づかなかった視点が持てるのです。映像で常にライブで話し合え、ときには相互に訪問できるという組み合わせは、環境分野

の研究者を育てるのに非常に有効だと思います。

**持田** リスク共生型というJSTプログラムで、それを核にリーダーを養成していく。私も何人か留学生を引き受けていますが、ミャンマーから来た留学生は自国に戻って環境分野で活躍し、沿岸のマングローブの第一人者になりつつあります。こうした広いネットワークもできますし、これからも草の根やJICAの環境活動に応募するなど、外部と連携しながら、環境ネットワークをアジアや世界に広げていきたいですね。

**金子** 宮脇、青木、中西先生の共通点は、従来の常識にとられずに、自然や現実を誠実に見つめ続けたことです。環境をゼロリスクとして捉え、細かい仕組みを研究しているうちは、問題はまったく解決しないでしょう。実社会で役に立つため、いかに応用できるかは基礎的な知識に立脚するのですが、私たちは環境リスクの中に、生態・災害・法律といった広い分野の学生が集まって、環境に生じるリスクをどうしたら減らせるかというコアな考えで束ねています。リスクを捉えて解析し、負荷を減らすための提案ができる彼らは、非常に頼もしい人材に育っています。

— 興味深いお話、ありがとうございました。

「リスク共生型環境再生リーダー育成」短期プログラム

「短期コース学生による成果発表会」開催

2011年2月10-24日の15日間、6カ国の連携大学から学生7名と教員10名が来日し、日本での短期プログラムに参加しました。このプログラムはYNUの立地を生かし、国際協力機構(JICA)、JICA帰国専門家連絡会かながわ(JECK)の講師による日本の環境技術や援助に関する講義、地元大手や中小企業の訪問、そして千葉の棚田見学を行いました。また、来日教員による講義と、プログラムの最後に行われた参加学生による成果発表会は、IME(Interactive Multimedia Education: 双方向ハイビジョン遠隔講義システム)を通じて連携大学にも配信され、日本の環境問題への取組みを踏まえて、それぞれの国における環境問題の解決への糸口を参加者全員で議論しました。



今回の参加者はナイロビ大学(ケニア)、アンタナナリボ大学(マダガスカル)、ランブン大学(インドネシア)、マレーシア科学大学(マレーシア)、カサセート大学(タイ)、フィリピン大学(フィリピン)と多彩。インターネットでの遠隔授業を行った

※1 環境科学研究センター … 1973年にYNUに設置された、環境問題を多角的・総合的に研究するための機関。2001年、大学院環境情報学府・研究院に改組。  
 ※2 植物群落 … 同じ場所ですべてに生育しているひとまとまりの植物群をいう。同じような立地(環境)には同じような種の組み合わせが繰り返されることから、種組成をもとに類型化される。  
 ※3 JSTプログラム … 科学技術振興機構(JST)が支援する科学技術連携施策群のプログラム。  
 ※4 共生 … 生物は食う-食われるや、同じ餌をめぐる競争する関係にあるが、それ以外に互いに存在することで利益を得ていることがある。ここでは、リスクを敵視するのではなくリスクの存在を認めて、うまく付き合おうという意味で使っている。

## 持続可能性と創造性をキーワードに 都市の未来を提出する

# 都市イノベーション学府・研究院 誕生！

2011年4月、新たな大学院「都市イノベーション学府・研究院」がスタート！

横浜をベースに、サステイナブル(持続可能)でクリエイティブ(創造的)な都市の未来像が探求される。

建築、都市文化、都市基盤、地域社会の4分野を融合させ、

特長あるスタジオ式教育プログラムによる実践的な大学院教育を実施！

**梅本洋一** 都市イノベーション学府・研究院設置準備委員長／教育人間科学部マルチメディア文化課程 教授

聞き手：広報・渉外室

## 創造的で持続的な 都市の未来像をめざして

—— 都市イノベーション学府・研究院がめざすものは何でしょう？

150年前の開港と共に生まれた横浜という都市は、港を中心に作られた都市です。明治以来、海運貿易の拠点であり、外国の文化の窓口でもあったわけです。だから国際的な金融街もあったし、街のいたるところから外国語が聞こえてきた過去もあります。そして第二次大戦後は、アメリカ軍が進駐していました。アメリカ文化が流入して、同時代のポップスはまず横浜から聞こえてきたものでした。横浜港には豪華客船が入港し、大棧橋近くの山下町には外国人ばかりが宿泊するようなホテルが3軒もありました。

ところが、20世紀半ばから、船から飛行機に運輸の中心が移り、金融街も横浜に存在す

る必要がなくなった。東京の大手町にあればいいんです。3軒の豪華なホテルのうち2軒はもう存在していません。情報社会になってからは、外国の情報はネットで直接入ってきます。別に横浜に行かないと最新の情報が手に入らないということもなくなりました。かつて横浜が持っていたメリットは次々に失われていく。そうしたとき、横浜はどうしたらいいのか？

確かに、横浜は統計的には東京に次ぐ日本第2の人口を持つ都市です。大阪よりも人口が多いんです。でも、それは都筑区などが東京のベッドタウン化して人口が増えたからで、そうした場所に住む人たちは横浜旧市街に來なくても、東京にダイレクトインできます。だから横浜旧市街はかつての賑わいは失われた感じがします。そんな中で横浜市は創造都市や映像文化都市を標榜しています。でもどんなものを創造する都市なのか？ どんな映像文化を生むのか？ そのためにはどんな場所が必要なのか？ 考えるべき問題はとて多いですね。つまり、横浜を舞台に都市をどのように再生させ、そこに持続可能で創造的な変化を生むにはどうしたらいいのか、それを考えていくのが「都市イノベーション学府・研究院」だと言えるでしょう。だから、ぼくらにとって横浜という都市は格好の舞台装置なんです。YNUに「都市イノベーション学府・研究院」ができるのは、だから、歴史的な必然でもあると思いますよ。

—— そのフォーマットの中で、建築と都市文化創造が結びあっていくわけですね。

そうです。横浜にはまだ近代建築が残っていますが、それをどうやって現代の都市と結節し、そこにはどのような文化芸術創造がふさわしいのかを実践的に考えていきたいですね。ニューヨークに限らずロンドンやパリでも、かつての倉庫が美術館や劇場に生まれ変わっています。そこが新しいアートを生む拠点になっています。横浜にも、かつての日本郵船の倉庫がアート・スペースになっているBankART NYKがあります。創造都市をめざす先駆的な試みでしょうね。

工学府から都市イノベーション学府に移る建築家養成を目的にする「建築都市デザインコース (Y-GSA)」や新たに設立される「横浜都市文化コース (Y-GSC)」は、「建築都市文化専攻」の中核として、新たな都市再生のモデルや文化創造のモデルを提出していくはずですよ。

—— シビルエンジニアリングと共生社会への観点結びついて「都市地域社会専攻」が構成されていますね。

ええ。寿町や黄金町という町名をご存じでしょう。そこには、アジアを中心とした国籍を異にする多くの人が集住しています。だから、当然のこととして、多種多様な問



横浜を舞台に、  
新たな都市再生モデル、  
文化創造のモデルを発信していきます

題が生じています。もちろん都市基盤を改善すれば解決する問題もあるでしょうし、人と人の間に生じる問題を解決するには、もちろん「共生社会」をめざす多様な仕組みを実験していかなければなりません。そして、こうした問題が生じている、あるいは将来生じることになる予想されるところは世界各地にあるんです。つまり、横浜の現在を都市基盤の面から、あるいは共生社会といった視点から分析してみると、それは世界共通の問題でもあり得る。だから、工学的な知と人文社会学的な知が結び合っ、現代の都市の問題に、絶え間なく解法を与えていくことが非常に重要なこととなります。

—— お話を聞いていると、今までの講義や演習といったやり方の授業では追いつけない気がしますが……。

そうですね。だから、ぼくらはスタジオ式教育システムを、この大学院全体に応用してみたいと思ったんです。もともとY-GSAでは建築家養成のために、このスタジオ方式の教育を全面的に採用してきました。問題を与え、それを教員の指導の下に少人数で実践的な解法に導くやり方、それがスタジオ方式の教育です。多くの優れた建築家が、このスタジオ式教育が育っています。だからY-GSAやY-GSCはもちろんですが、都市

基盤や地域社会の研究にも、このスタジオ方式の教育を大幅に取り入れています。

YNUには実践性、先進性、開放性、国際性という4つの理念がありますが、「都市イノベーション学府・研究院」は、その4つ全部が備えられる場所になるように、ぼくらスタッフも頑張っていきたいですね。

Yoichi Umemoto

1953年、横浜生まれ。パリ第8大学芸術学研究所博士課程修了。現在、本学教育人間科学部教授、映画評論家。2010年度から都市イノベーション学府・研究院設置準備委員長。



### 都市イノベーションに関する高度専門職業人・リーダーの育成を目指します

本学府では、少人数制の実習・演習・研修を教育の柱に据え、ケーススタディーやコースワークを重視した実務家型人材養成を目指した教育プログラムを導入することで、本学の実践教育の伝統を強化します。研究指導にあつては学生一人一人の修得分野や関心に応じて、きめ細かな履修指導を行うこととしています。

専攻・コース概要 [詳細はWEBサイトで ▶ www.urban.ynu.jp](http://www.urban.ynu.jp)

#### 博士課程前期

##### 建築都市文化専攻

- ・建築都市文化コース (専門分野研究方式)
- ・建築都市デザインコース Y-GSA (スタジオ教育方式)
- ・横浜都市文化コース Y-GSC (スタジオ教育方式)

現代の都市をめぐる問題の所在について十全な知識を持ちながら、都市の将来を担いうる説得力ある空間を実践的に提案する人材、そして都市で先進的な文化・芸術活動を持続的に支援する人材を養成する。日本を代表する都市であり、「実験都市」の特徴を持つユニークな都市である横浜を教育研究の中心的フィールドにすること、スタジオ教育方式を通して実践力の強化をはかることも可能である。

##### 都市地域社会専攻

- ・都市地域社会コース (専門分野研究方式)
- ・国際基盤学コース IGSI (スタジオ教育方式)

建築学分野と文化・芸術学分野の2教育研究分野により、建築、都市、文化に関わる諸領域で、それぞれの領域の先進的な研究についての十全な知識を有し、実践的な研究によって、その成果を都市のイノベーションとして成立させ得る人材を養成する。

#### 博士課程後期

##### 都市イノベーション専攻

(専門分野研究方式)

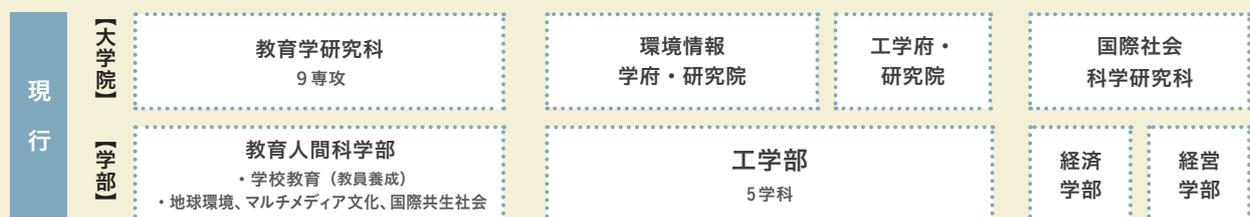
世界の多様な都市・地域をめぐる諸問題について、それぞれに必要なとされる技術的・社会的・文化的・歴史的な専門知識を持ちながら、諸都市・諸地域の将来を担いうる説得力ある構想や空間、社会基盤や文化基盤を実践的に提案・設計・構築することのできる人材、そして諸都市・諸地域の学問・文化・芸術・社会活動を持続的・実践的に主導・支援することのできる人材を養成する。

## 2011年4月、学部・大学院の大幅な改組再編を行います

横浜国立大学 学部・大学院改組計画の概要



### より実践的な教育研究・新たな学問領域の創設



【特別対談】

# スタジオ教育を通して ビジョンを持った建築家を育成

世界に通用する思想を持った建築家・山本理顕教授と、若き頃より建築設計から強い社会性を発していた北山 恒教授。都市イノベーション学府・研究院が特徴とするスタジオ教育を通して、未来を担う建築家の育成とその役割について伺いました。

聞き手／広報・渉外室

## 100年後まで見据えた 社会貢献できる建築とは

—— まずは、Y-GSAの核となってきたお二人について教えてください。

**北山** 20代の頃に読んだ山本さんの論文「闕論」は衝撃的で、以来ずっと影響を受け続けています。空間をセットすると、そこに入ってくる行為や思想までも規定します。2LDKの家という空間が家族のあり方を決め、教壇や黒板のある教室という空間が、教える、教えられるという関係性や概念を作っているのです。山本さんが設計したのはこだて未来大学では、広場のような大空間の中で、突然語りかけるように授業が始まったりするわけです。そうすると教育の概念が変わる。それが山本さんのメッセージです。

Y-GSAの立ち上げでは、山本さんに達磨に眼を入れるようにY-GSAに魂や思想性を入れ、教育組織そのものをデザインしてもらいました。

**山本** 北山さんは、大学院の頃から横浜国大の人たちと一緒にワークショップというアトリエを作り、非常に強い社会性を持って設計

活動を始めていました。

クライアントは、利潤を上げることをはじめ、さまざまな要求を出します。しかし、その要求通りに作られた高層建築や派手な商業建築、周りの小さな建築に配慮しない建築は周囲の人たちにとって迷惑な存在です。求められるままに利潤を追求して作るだけでよいのなら、大学の建築学科はいらないのです。

—— 大学では、専門的な技術や知識だけを学ぶのではないのですか。

**北山** そうです。企業が最大利益を上げるためのルールや資本装置を作り、海の周りの一番よい場所は、埋め立てて産業のために使っているから、人も船もほとんどいない。シドニーならば、人がいてヨットが浮かんでいて、海を楽しんでいますね。それができない現状をどうするか、Y-GSAでは未来の生活のビジョンを持てる頭を作ろうとしているのです。

**山本** 私たちが住むための町をどうしたらいいのか、どんな都市だったら住みやすいのか、そのためにどんな建築や住宅なら住む人たちが快適になるのかということを考えて本来建築はつくられているはずなのです。利潤だけ

でなく、都市全体や周辺環境にどれだけ貢献するかということを施主や周辺の人たちと一緒に考えるわけです。Y-GSAは、そうした思想を持った建築家を育てるための教育システムです。

**北山** 「建築をつくることは未来をつくることである」というY-GSAのマニフェストは、山本さんが作ってくれました。建築をつくるという行為そのものが、現代の空間を決め、社会システムを再構築し、未来をデザインすることになります。地域社会の固有の文化を、世界に向かって問いかける役割も担います。

—— 未来をつくるとは、それを担う建築家を育てることであるのでしょうか。

**山本** 100年もそこにある建築をつくる建築家は、空間的にも時間的にも都市全体に責任がある、100年後の人にも責任があるという視野が不可欠です。利潤追求や、技術、知識だけでは決して解決できない。Y-GSAはそこを徹底して教育しています。

**北山** 有益で有用ですぐに使える便利な道具ではなく、思想を持って次の未来をデザイン

### 山本理顕

大学院工学研究院 教授



建築をつくることは  
都市全体に責任がある。  
現在の空間を決めるとい  
う行為そのものが、  
未来をデザインすることです

横浜市の俯瞰地図を見ながら説明する山本教授。対談はお二人の真摯な思いが伝わってくるものだった



できる人間を作ろうとしているのです。

## 先進的スタジオスタイル Y-GSAがめざすもの

—— Y-GSAのシステムや教育について、もう少し詳しく聞かせてください。

**北山** 立ち上げ当時の学長は、弁護士という専門家が教授となってロースクールで教えるのと同様に、建築家というプロフェッショナルが教える重要さを認識していたのです。従来、国立大学の教授は兼任不可で、設計事務所を持ってませんが、Y-GSAは独立法人化して、外に事務所を持ち社会的活動をしている人を教授として招いた。世界では当たり前ですが、日本の国立大学では初めてで、独自の教育が可能になりました。

**山本** 日本の研究室システムは、「大学院とは基本的に研究者を養成するための教育システム」という文科省の認識によるものです。学生は研究室に所属して、研究室は次の研究者を育てる再生産システム。しかし、それだけでは思想を持った建築家は育ちません。

一方、スタジオシステムは学生が主体です。

自分の意志で設計の勉強ができる場所だと思います。

**北山** アメリカとヨーロッパではスタジオシステムにも違いがあり、日本の研究室システムも、優秀な建築家を輩出しています。現在は、それぞれの長所から、さらに新しいシステムを求めて検討している最中です。

研究室システムが高度に有効に作動する東大は、スタジオシステムにはできないでしょう。これまでは、東大を頂点とする完全なツリー構造でしたが、私たちのY-GSAの今までにない組織や学生のための教育は、他大学に大きな影響を与えています。

—— 海外からの反応や、交流はどうでしょうか。

**北山** 常に入学希望者はいますが、国費で学ぶ学生でも、Y-GSAの求める水準に達しないことが多いです。留学生が多ければ開かれた大学、国際化されているというのは違うと思います。学生たちはお互いから刺激を受けて学んでいるので、学生のレベルが非常に重要です。

**山本** Y-GSAの学生が海外で学ぶ先も、しっ

かり査定します。夏休みに行く海外の大学とのワークショップでは、混成チームをいくつか作り、相互の都市を見ながら違った視点で提案をして、英語でのプレゼン能力を磨いています。インターンシップは、スペインやポルトガル、オランダ、スイス、ノルウェー他、著名な建築事務所を審査した上で、毎年4~5名の学生が4ヶ月ぐらい学びに行っています。

## 未来都市横浜の シンクタンクとして

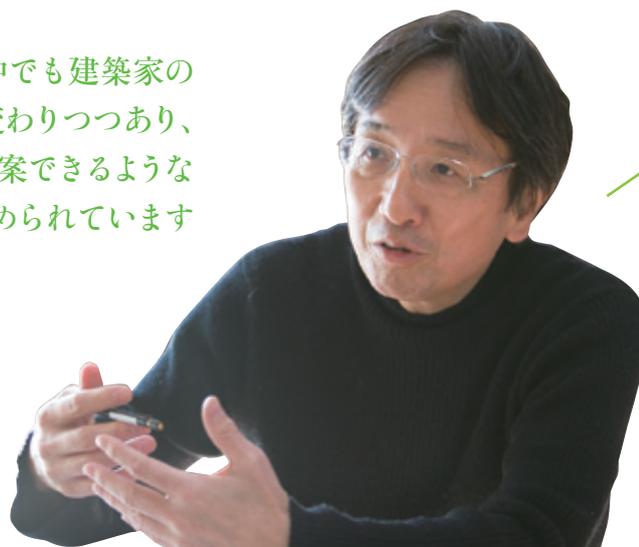
—— ところで、横浜市とY-GSAは、どのように関わっているのでしょうか。

**山本** Y-GSAは、横浜という都市を題材に、現代都市の特徴的な問題を時間的・空間的に捉え、それを理論的に明らかにするとともに、未来をデザインし提案しています。

たとえば、産業や工場を集積していたベイエリアは使われなくなって空洞化しています。放置しておけばタワーマンションが建ち、周りと関係性を持たない高層建築の50年後は廃墟になってしまいます。

**北山** ウォーターフロントのエリアを、低層

世界の中でも建築家の  
果たす役割は変わりつつあり、  
社会をデザインし提案できるような  
人材が求められています



北山 恒

大学院工学研究院 教授



Y-GSAでは主に年2回(前期・後期各1回)のワークショップなどを通して、海外との交流も活発に行っている

1. カタール・ニヤ工科大学 [UPC] との共同ワークショップ(バルセロナ, 2008)
2. 台湾・東海大学 [Tunghai University] との共同ワークショップ(台中, 2009)
3. スイス連邦工科大学 [ETH Zürich] との共同ワークショップ(横浜, 2007)
4. 韓国・延世大学 [Yonsei University] から教授を招聘してのワークショップ(横浜, 2010)

で低家賃でも住めるような、働く、休む、遊ぶといった、多様な機能が混在する場所にするというビジョンは、市長の交代とともにリセットされてしまいました。しかし、インナーハーバープロジェクトは生き残っており、生活都市の未来ビジョンを作るなかで、市が利潤追求の道具にならないような制度の網掛けができてくる可能性があります。我々はシンクタンクとして継続して関わり、横浜市もそれを期待しています。

## 社会に対して提案し、未来に伝える建築家たれ

—— 都市建築の未来像については、どのように考えていますか。

**山本** 今、日本の国はソーシャルハウジングを作ることをやめてしまいました。数だけをカウントすれば住宅は世帯数より多いけれど、老朽化してエレベーターもなく、空調も整わない、高齢者が住めるようなものではない。住宅は、最後のセーフティーネットであり、高齢になって収入がなくなっても、私たちは生活者としてそこに住む権利があります。住むための住宅があってこそ、子育てもできるのです。

どうい社会や建築をつくっていけばよいかということ、Y-GSAでは建築家側の問題、重要なテーマとして徹底して考えています。我々は建築に対するスキルがある分、新しい社会や空間に対して強い提案力を持っているのです。

**北山** 世界の中でも建築家の果たす役割は変わりつつあります。いわれるままに作る技術者ではなく、プログラムをデザインする、ひょっとしたら建築ではなく社会をデザインする領域に入っていき、社会に対して提案できないと建築家として通用しなくなるかもしれません。

都市の生成変化していくメカニズムは、土地の区分所有の問題で、戦後に作った民主主義に基づく社会制度にあり、問題は山積しています。しかし、肯定的に見れば、家族というものが解体し都市の中で孤立している人々を、もう一回関係づけていくような、新しい概念で住めるような空間装置を啓発しているのです。

山本さんは“地域社会圏”という一戸の建物でもなく、街でもなく、まだ世の中には存在しないけれど、地域社会という概念をひとつの建築として作ろうとしています。家族というもので人間関係を担保しなくても、もっと違う人間の集合形式を空間が表明できるということです。

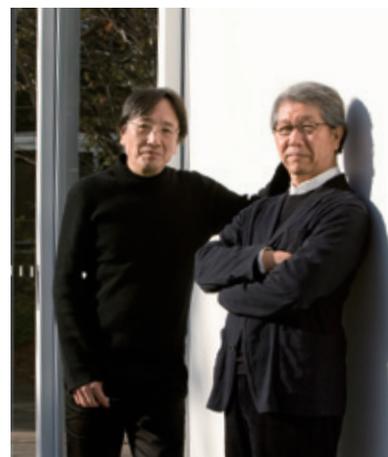
—— 最後に、学生へのメッセージをお願いします。

**山本** Y-GSAでは、建築を通して都市環境に貢献できるということ、なぜその建築をつくったのか、100年後も残る建築で未来に対するメッセージが伝達できるのだということ、を学んでほしい。建築の提案をすることによって、大きなビジョンを作ってほしいですね。

**北山** 自分自身で意志決定してもらいたいと

思います。ブランドや階層化された偏差値、社会の枠組みにとられずに。建築家というのは、最終的に判断や意志決定する仕事。それができる人こそがよい建築家になれるからです。

—— 本日はありがとうございました。



### Y-GSA Y-GSAとは

プロフェッサー・アーキテクトによる、スタジオ制の修士課程プログラム。建築デザインだけでなく、建築理論、都市環境、構造技術の3分野が緩やかに連携し、建築設計によって実体化され、実践的なプロジェクトを実行。幅広い視野で、次世代の環境を創造し得る建築家を養成する。2011年4月より、都市イノベーション学府・大学院へ改組。

# Y-GSAを構成する4つのスタジオ

4人の建築家を中心に組織され、少人数の学生とともにプロジェクトを遂行し、過程を共有するY-GSA。学内外の幅広い分野の研究者が参加する「開かれたスタジオ教育」は、次世代の環境を創造し得る建築家を養成します。

## 山本理顕スタジオ Riken Yamamoto

1945年生まれ。東京芸術大学大学院建築専攻修了。1973年山本理顕設計工場設立。2007年横浜国立大学教授。2000年「公立はこだて未来大学」(建築学会賞)ほか作品多数。



### 「地域社会圏モデル」

経済活動を活性化させるための場所となった近代都市で、相互に関わりを持たず孤立化した住宅。本来、住むための場所である都市を再構築するために、住宅同士の関わりや、コミュニティのシステム、住人としての高齢者や子供たちをサポートする施設など、具体的な空間において考え、私たちが住むに相応しい「地域社会圏モデル」を構築する。

上：課題作品「ひとつながりの山谷 地域生活延長型地域社会圏モデル」(課題「地域社会圏モデル」) 修士課程1年/坂爪佑丞 下：「地域社会圏モデル」インディペンデント・スタジオの様子

## 北山 恒スタジオ Koh Kitayama

1950年生まれ。横浜国立大学大学院修士課程修了。1995年architecture WORKSHOP設立主宰。1987年横浜国立大学専任講師、1995年同助教授、2001年同教授。2006年「洗足の連結住棟」(日本建築学会賞他)ほか作品多数。



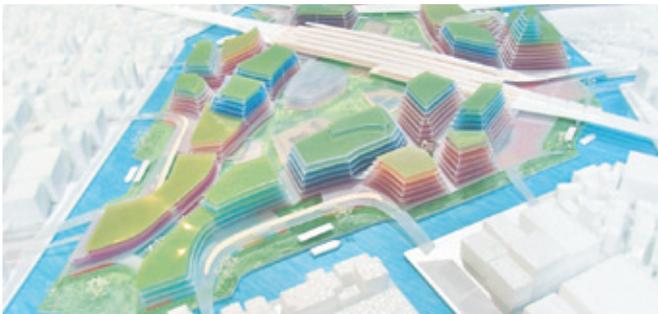
### 「都市の環境単位」の開発

都市型社会に移行した日本の中で、減衰と拡張という相反する都市動向を見せる横浜の都心部と郊外の双方をプロジェクト・サイトとして、場所の帰属感を生む「環境単位」というハードウェアの開発に取り組む。それは、その場所を経験すると明確な場所のアイデンティティが感じられる何か。実態としての空間であり、実態のないシステムでもある。

上：課題作品「yokohama -水辺に浮かぶ森」(課題「横浜未来都市構想」) 修士課程1年/平林瞳 下：エスキース中の様子

## 飯田善彦スタジオ Yoshihiko Iida

1950年生まれ。横浜国立大学工学部建築学科卒業。1986年飯田善彦建築工房設立。2007年横浜国立大学教授。2009年「横須賀市当鴨居住宅」(神奈川建築コンクール優秀賞)ほか作品多数。



### 「街に出て建築を考える」

グローバリゼーションによって、都市システムは機能不全に陥ったが、地域社会を建築資産として残す西欧諸都市は復活しつつある。自ら破壊してきた日本の都市の活路として、飯田スタジオでは都市を構成する「地域」でのフィールドワークを重視し、2010年前期は、「横浜駅および周辺の再整備計画」を取り上げた。行政や市民への発表も予定している。

上：課題作品「横浜駅を島にする。」(課題「横浜駅及び周辺の再整備計画」) 修士課程1年/真鍋友理 下：スタジオ課題から発展し、実施設計された京急高架下文化芸術活動拠点「日ノ出スタジオ」(2008)

## 西沢立衛スタジオ Ryue Nishizawa

1966年生まれ。横浜国立大学大学院修士課程修了。1995年妹島和世と共にSANAA設立。1997年西沢立衛建築設計事務所設立。2001年横浜国立大学助教授、2010年同教授。2010年プリツカー賞受賞。2010年「豊島美術館」ほか作品多数。



### 「新しい時代の建築をめざして」

西沢スタジオがめざすのは、これからの時代の価値観をダイナミックに表す建築。私たちの生活様式や考え、ライフスタイルを変える都市・建築と、それらに新しい変化を要求することもある私たちの生き方や価値観。両者の創造的な関係をふまえ、都市と建築を同時に計画する手法で、横浜という既存の都市、歴史を背景とした建築・都市研究とする。

上：課題作品「谷戸坂」(課題「新しい時代の建築をめざして」) 修士課程2年/山内祥吾 下：エスキース中の様子

## 「島」のイメージと異なるコルシカ島を研究テーマに

山奥の渓谷に数家族が集合住宅で暮らす地中海のフランス領の島、コルシカ島を研究するとともに、「日本コルシカ協会」を設立して旅行情報を提供している。今後はツーリズムの研究にも取り組む予定だ。



長谷川秀樹

Hideki Hasegawa

教育人間科学部国際共生社会課程 准教授

1970年生まれ。博士(国際関係学)。立命館大学大学院博士課程修了後、千葉大学助手を経て現職。専門はフランス・フランス語圏文化社会論。

聞き手／塚本弥幸（教育人間科学部国際共生社会課程 3年）

### 観光資源としてツーリズムの重要性を調査で実感

—— 長谷川先生はコルシカ島の研究をされていますが、講義でも取り上げているのでしょうか？

コルシカ島というのは、あまりにもディープな世界なので、つまり、「島国」といわれている日本人がイメージする「島」とは全く異なる世界なので、いきなり授業で取り上げても、ついてこられる学生はほとんどいないと思います。

そこで、「観光」や「都市」などを統一テーマに、各教員が一回だけ担当する授業の際にコルシカ島の映像を使って紹介しました。「都市」と「島」って一見、正反対のようにも見えるかもしれませんが、コルシカ島の伝統的集落は海から攻撃してくる敵から守るために山奥の渓谷に数家族が一緒に「塔」、あるいは「城」と呼ばれる集合住宅で暮らしているので、さながら小摩天楼の集まりのようなものなのです。

—— そうした授業を受講した学生の反応はい

かがですか？

コルシカ島＝ナポレオンの出身地、という図式を持った一昔前の学生は、色々な側面からこの島のことを知ることができて面白かった、と言います。ところが、最近の学生はコルシカ島の名前さえ知らない。だから、素直に受け入れているという感じです。ただ、コルシカ島の音楽だけは初めて聞く全く新しい音楽だと驚く学生もいますね。

—— フランスやコルシカ島に関連してどのような活動をされているのですか？

10年前に「日本コルシカ協会」を設立して、それを2007年にNPO法人に昇格させました。このNPOは、日本の旅行者や旅行会社にコルシカ島旅行に必要な情報を提供することを主な活動としていて、結構、問い合わせがきます。なぜなら、日本にはコルシカ島についてのガイドブックがないからなんです。

「旅行」以外に多いのが高校や合唱団からの問い合わせです。アンリ・トマジの『コルシカ島の12の歌』にかかわるものが多いです

ね。コルシカ語が分かるのは、日本には私以外にいないからです。この女声合唱曲は、よく使われているにもかかわらず、いまだに定訳がありません。ただし、トマジが編曲した1970年代は、コルシカ語はまだ言語としては確立していない時代で、歌詞をよく見ると、現在とは全く違う綴りで書かれていたり、フランス語やイタリア語と混同されていて非常に難解です。

—— 今後はどのような活動や研究をされる予定ですか？

「コルシカ島」という一つのフィールドからやってみたいと思っていることが二つあります。一つは「島嶼」から見た「ツーリズム」のあり方の研究です。コルシカ島との比較としてフランス語圏の島嶼の幾つかにフィールド調査に行ってきました。例えば、インド洋のレユニオン島や南太平洋のフランス領の島々、カナダ沖の幾つかのフランス語圏の島です。これまでの調査で痛感したのは、ツーリズムの存在の大きさです。もちろんその形態や住民の反応は島によって違いますから、単純に比較するのは難しい。しかし、一つ言えるのは、農村、民族、文化といった要素が観光の最大の資源になっているという点です。

そしてもう一つは、島嶼を含めた農山漁村ツーリズムと都市部住民とのかわりです。フランスでは何もない辺鄙なところに、都市生活者がセカンドハウスを構えていたり、農家に滞在するなどしています。フランスが世界最大の観光大国であるのは、農村部でのキャパシティが高いことと、都市と農村の交流に力を入れ、都市住民が食や農を「文化」の一つとして深く考えさせる教育や政策、そして、休暇を取りやすくするシステムが整っているからでしょう。「受け入れ側」と「訪れる側」双方の社会・文化的背景と両者を結びつけるフランスの政策について調べてみたいと思っています。

—— 本日はありがとうございました。



長谷川ゼミのメンバー。前列右から2人目が聞き手の塚本さん



# 日常的な言葉からコミュニケーションを解明

人間と言語との係わり合いを、日常的な会話の場面から解明する言葉の研究。  
特に、日本人のための言葉の使い方を研究し、対人コミュニケーションや  
組織内コミュニケーションの力の向上に役立てたい。

聞き手／高村友美（経営学部経営学科 2年）



小林正佳

Masayoshi Kobayashi

経営学部国際経営学科 教授

1959年生まれ。文学修士、言語学博士。YNUでのゼミは2011年度に19年目を迎える。専門は、社会言語学、語用論、教育言語学。

## 小林ゼミのモットーは、 優しく（易しく）、楽しく！

—— 小林先生はどのような研究をされている  
のでしょうか？

言語学の中でも、社会言語学、語用論、そして教育言語学です。平たく言うと、私たち人間が日常の中で使っている、コミュニケーションの言葉やコンテキストにおける言葉の特質やメカニズムを探りましょう、という、人間と言語との係わり合いを解明していく研究です。

私はごくごく一般的な日常の場面に着目しており、わりと実証的な研究になっています。特に私は、人に物を頼む、ということに着目しているので、例えば、ファミリーレストランでコーヒーをお代わりする際に人々はどんな風に依頼しているのかと、実際に足を運んで2、3時間もねばって観察することもあります。そうして人が話すことに関するデータを集めたり、また、メールや手紙やレポートといった書き言葉も同様に研究対象です。普通に生活していれば、私たちは普通に言葉を使います。言葉を使う場面には背景があり、人の心理が働き、様々な人間関係があります。社会言語学というくらいですから、社会的な要素、つまり、年齢や性別や上下関係などのファクターも一つの分析の観点になります。

—— 現在取り組んでいるテーマを教えてください。

近年の日本社会では、コミュニケーション能力が大切だ、ということが広く言われています。就職にあたっては特に必要とされ、学生の皆さんも関心があるでしょう。書店を覗けば、身近なコミュニケーション術から経営コンサルタントのような専門書、アカデミックな学術書まで多彩にあります。多くの場合で欧米の考え方が目立ちます。私自身は、もっと日本人向けの教育プログラムが必要な



小林ゼミの2年生メンバー。前列右が聞き手の高村さん

のではないかと考えています。日本人が自然に、ストレスを感じることなく自分の思うことや感じることを、言いたいことを、お互いに傷つけ合うことなく伝えられる言葉の能力をつけるべきではないか。その能力を育成するための教材や指導方法を、体系的に作っていくことが大きなテーマです。少しでもお互いがハッピーになれる日常を送ることができるよう、言語的アプローチからの知見を導き出す研究をしています。

—— この研究テーマを、どのように教育につなげていますか？

経営学部においては言語学としてそのままを教えるのではなく、真理追究のための言葉の使い方や、レポートの書き方に関する知識や技能を、習得してもらえよう目指しています。小中高では作文の教育がなされますが、なぜか大学ではレポートくらい書いて当然だろうという雰囲気があります。これには、学生の皆さんも戸惑っていると思うのです。私は、言語コミュニケーション論や国際コミュニケーション論という科目を担当していますが、その中で時間を割き、話し言葉や書き言

葉に関する専門的な知見を紹介しています。もちろんレポートの書き方も教授します。お互い楽しくなるための言葉を、自然に、時には意識的に、使えるようになるためのヒントや刺激を、私の講義で与えていきたいと思っています。

—— ゼミでの活動について教えてください。

対人コミュニケーションや組織内コミュニケーションに役立てられる知識・技能の習得を目指す時、大きな講義室では出来ないロールプレイやディスカッションも、少人数のゼミでは行えます。学生にいつも言うのは、「他ならぬ自分の人生、自分が幸せになれることを追求してほしい」。そのための勉強です。自分が幸せになるために勉強すること、ひいてはそれが、他人、社会、国家、世界全体の幸せにつながると思います。モットーは、「優しく（易しく）、楽しく」。言葉は生き物です。言語コミュニケーションを学ぶことは、自分や人の心を学ぶことでもあると思います。

—— 本日はありがとうございました。

# Campus News

旬の情報をお届け!



## イベント報告

### 雨にも、風にも、台風にも負けず!! 第5回ホームカミングデーを盛大に開催

すっかり定着してきた横浜国立大学のホームカミングデーが2010年10月30日、第5回目として開催されました。当日は雨、風… 台風の接近により、あいにくの天候となりましたが、参加人数も850人と、盛大となりました。

今回は、本学の卒業生で 現在 中国の重点大学となっている上海交通大学で副学長という重責を担

っている陳 剛先生を迎えてのメイン講演をはじめ、世界的に活躍している卒業生や教員の講演や、初めての留学生の参加など、国際性を推進している本学の姿を皆さまに再認識していただける内容となりました。

昨年に引き続き本学を目指す人のための「入試説明会」、グリークラブの合唱など、さまざまな企画も用意され、多くの方が足を運び楽しんでいました。

交流会では、渡辺慎介実行委員長の挨拶ではじまり、留学生による各国の民族舞踊や、民謡研究会合唱団(みんけん)による演技などが行われ、学生、卒業生、教職員が一体となって喜びあっていました。

2011年は第6回目として「世界に輝け! YNUへ連携と交流の深化を目指して」をテーマに10月29日(土)に開催が決定しています。

1. メイン講演者の陳先生
2. グリークラブの合唱コンサートの様子
3. 盛り上がりみせる交流会の様子
4. 交流会で挨拶する鈴木学長

## サイエンスカフェ開催

### 漢字を通して日本と中国文化を考える機会を

2月23日(水)、横浜商工会議所談話室において、第26回サイエンスカフェを開催しました。平成22年度のサイエンスカフェは横浜国大ベストティーチャー賞の受賞者を講師に迎え、全5回、様々なテーマで開催しました。今年度最後となる第26回サイエンスカフェでは、山西大学言語科学研究所副所長・教授を務められている馮良珍先生を講師に迎えました。馮先生は2004年～2007年の間、

横浜国立大学教育人間科学部に教授として在籍しており、その際、活躍が認められベストティーチャー賞を受賞しています。

今回、「中国の変わりつつあるもの・変わらぬもの—中国語・日本語の研究と教育を通じて感じたこと」と題し、漢字が中国から日本に伝来した後、どのように日本の文字が発展してきたか、また、日本と同じように中国から漢字が伝来した

国のほとんどが漢字ではなく新しい文字を使うことになっている中、なぜ日本では漢字が現在使われているのかというテーマで馮先生の考えを紹介しました。その後、活発な意見交換が行われ、参加者みずから新しい説を出すなどの盛り上がりを見せました。

今後も、様々なテーマでサイエンスカフェを開催する予定です。



1. 活発な議論を交わす参加者達
2. 現在の中国で使われている漢字を紹介する馮先生
3. 馮先生は、YNUで「古事記」などの研究をしていた

## 横浜国立大学のサイエンスカフェ 2010年度開催のテーマ

- 2010年6月23日 **ダーウィン「種の起源」の正式な書名を知っていますか?**  
—進化生物学者を超えて (教育人間科学部 榑沼範久 准教授)
- 2010年7月22日 **キカイとカラダの意外な関係**  
(環境情報研究院 白石俊彦 准教授)
- 2010年9月29日 **あなたは自分の生活の環境負荷を知っていますか?**  
(教育人間科学部 松本真哉 准教授)
- 2010年12月8日 **マーケティングへの招待—価値を探る『コト・ため発想』のススメ**  
(国際社会科学研究科 谷地弘安 准教授)
- 2011年2月23日 **中国の変わりつつあるもの・変わらぬもの—  
中国語・日本語の研究と教育を通じて感じたこと—**  
(山西大学言語科学研究所 馮良珍副所長・教授 (元教育人間科学部教授))

過去のサイエンスカフェの様子や、今後のお知らせについてはこちらのページで紹介しています。ご興味のある方は是非、こちらをご覧ください。

[http://www.ynu.ac.jp/society/lifelong/science\\_cafe/](http://www.ynu.ac.jp/society/lifelong/science_cafe/)

新聞 NEWS PAPER

- 公開講座「これからの流域圏を考える」の5日目(最終講義)が開催された(7/18 読売新聞)
- 将来の学生確保につなげようと神奈川県内の大学が、小学生を対象に大学の魅力を発信する活動に力を入れている。横浜国立大学は年間を通じた農業や環境の体験学習を実施(8/3 神奈川新聞)
- 工学部建築学科の大型水槽で28日、「ひれ推進コンテスト」が行なわれ、約30名の高校生たちが参加した(8/29 読売新聞)
- 横浜国立大学が2011年度に実施する組織改革が明らかとなった。都市政策を専門に研究する大学院を新設し、将来の横浜の街づくりや都市計画づくりを担う人材を育成する。学部再編では工学部などを統合して理工学部を設置、地元企業との連携を進める(9/8 毎日新聞)
- 世界的な植樹活動で知られる宮脇昭名誉教授の「いのちの森づくり40年記念シンポジウム」が23日、横浜市内で開催(9/24 毎日新聞)
- 藤嶋昭氏(本学名誉博士・S41工学部卒)が川崎市・市文化賞を受賞(9/25 神奈川新聞)
- 「官僚に聞く」のコーナーで国交相となった馬淵澄夫氏(S59工学卒)のインタビュー記事が掲載(9/26 神奈川新聞)
- 「留学生獲得競争激化」と題し、横浜国立大学など県内の大学が、海外から優秀な留学生を獲得するため、受け入れ態勢の充実を図っている(10/1 読売新聞)
- 横浜国立大学はヤマハ発動機などと組み、保土ヶ谷区のと和田町駅周辺で電動アシスト自転車を1ヶ月間のレンタルする企画「ワダチャリ」がスタート、同時にアンケート調査も行なう。実験終了後に結果をまとめ、改善点などを区に提出する(10/10 神奈川・日本経済新聞)
- 「問われる「就業力」-かながわ人づくり-」の第3回目に鈴木邦雄学長が寄稿(10/11 神奈川新聞)
- 「第5回横浜国立大学ホームカミングデー」の案内記事掲載(10/21 神奈川・10/27 日経・10/28 読売・10/29 毎日新聞)
- 2010年度文化功労者に、環境リスク管理学中西準子氏(S36工学卒・現在名誉教授)と電気化学 藤嶋昭氏(S41工学卒・本学名誉博士)が選ばれる(10/26 朝日・読売・日経・毎日、10/27 朝日・読売・

日経・毎日・産経・神奈川・日刊工業新聞)

- 日本ユネスコ国内委員会MAB計画分科会主催でもある鈴木邦雄学長とユネスコ関係者3人で「ユネスコ・エコパーク」登録を目指す宮崎県の綾町を視察、「綾のまちづくりは自然との共生のモデルケース」と感銘を受けた(10/28 宮崎日日新聞)
- 大学院環境情報研究院 近藤正幸教授が「日独ソーラーデー」に参加、そこで得られた壮大な発電計画について寄稿(10/29 日経産業新聞)
- 秋の叙勲授章者発表、「瑞宝重光賞」鶴見尚弘名誉教授、「瑞宝中綬章」上城太一名誉教授と田崎清忠名誉教授が受賞(11/3 朝日・読売・毎日・神奈川・産経・日経・日刊工業新聞)
- 大学院国際社会科学部研究科 小池治教授が委員長を務める「松沢マニフェスト進捗評価委員会」が7日、横浜市内で行われた。委員会では毎年度、マニフェストで掲げた48項目を採点し、来年1月末をめぐり2期目4年間を総括評価する(11/8 読売新聞)
- 11月7日、経営学部の外国人留学生による日本語スピーチコンテストが開催された(11/8 読売新聞)
- 横須賀リサーチパーク(YRP)では、医療分野での情報通信技術(ICT)の拠点化を図るなど新たな試みを開始。ベンチャー棟には未来情報通信医療社会基盤センター 高橋富士信教授らの研究室があり、情報通信技術を医療現場に生かす様々な取り組みが行なわれている(11/16 朝日新聞)
- 放送大学神奈川学習センター 渡辺慎介所長(本学前理事・副学長/名誉教授)が講師を務めた「出前授業」が25日、附属横浜小学校で開かれ、児童41人が野鳥の生態や巣箱の作り方を学んだ(11/26 読売新聞)
- 臨時国会で承認が困難となりそうな日韓図書協定で、韓国へ引渡されるとされている「朝鮮王朝儀軌」が原本が複製かについて、朝鮮王朝史に詳しい教育人間科学部 須川栄徳教授のコメント記事が掲載(12/2 朝日新聞)
- 日産自動車と横浜国立大学とが連携し「未来フォーラム」を開催、カルロス・ゴーン社長による講演と討論会を開催(12/18 読売・神奈川 12/21 朝日新聞)

テレビ・ラジオ TV・RADIO

- 「ニュース・気象情報」(NHK総合 9/15) … JICAと本学との連携事業「アジア特別支援教育研修」の一環である研修生たちの特別支援学校訪問の様子を放送/教育人間科学部附属特別支援学校
- 「あさイチ」(NHK総合 9/21) … 話題の「美文字」を取り上げる特集の中で、リポーターと視聴者向けに字をキレイに書くコツを教授。生放送で、視聴者からのファックスによる質問に回答/教育人間科学部 青山浩之准教授
- 「明日のスイエンス」(NHK教育 10/19) … 未来に輝く科学者の卵を紹介するコーナーに出演/大学院工学部 井波 綾
- 「世界一受けたい授業」(日本テレビ 11/6) … 3時限目「家庭科」の「食欲の秋に嬉しい驚きマジック・クッキング!」で、カステラ・ラスクや、バスタでつくる絶品お菓子、簡単ミニ肉まんの作り方などを紹介/渋谷祥子名誉教授
- 「首都圏ネットワーク」(NHK総合 11/9) … 就職活動中の留学生として紹介された/経営学部4年 ヌルマトウベクゾット
- 「tvkニュース&天気予報」(テレビ神奈川 11/14) … 横浜で行なわれたAPEC閣僚会議、首脳会議の評価と解説/大学院国際社会科学部研究科 梶島洋美准教授
- 「土曜プレミアム「たけしの新・教育白書」」(フジテレビ 11/20) … 番組内で「数学」についてトーク出演/教育人間科学部 根上生也教授
- 「ニュースハーバー」(テレビ神奈川 12/22) … 神奈川県内の情報を伝える特集コーナーで、活動について紹介された/民謡研究会合唱団
- 「報道特番『ACTION 日本を動かすプロジェクト』」(日本テレビ 12/23) … 2010年1年間に起こった様々なニュースを振り返る番組内の「チリ落盤事故」関連で、チリにおける離婚をめぐる法状況について解説/大学院国際社会科学部研究科 奥山恭子教授
- 「超一流アスリートvs芸能人! 中居正広のスポーツ5番勝負」(日本テレビ 12/25) … クイズのお題として他競技の第一人者である宮崎大輔選手と本多雄一選手を相手にハンデつきでハードル100Mで対決/教育人間科学部4年 木村文子

横浜国立大学ホームページ URL ▶ <http://www.ynu>

横浜国立大学で行われる各イベントに関する情報は、上記アドレスからご覧になることができます。



【YNUお宝探訪②】

**中村順平作壁面彫刻**

横浜銀行旧本店を飾っていた壁面彫刻がみなとみらい線・馬車道駅に復元保存された際、その一部をYNUに移設したものです。作者の中村順平先生は、横浜高等工業学校建築学科の初代主任教授で、フランス国立美術学校(エコール・デ・ボザール)を最初に卒業した日本人として知られています。

**横浜国立大学広報誌 第191号**

2011年3月25日発行

編集・発行

国立大学法人横浜国立大学広報委員会  
〒240-8501 横浜市保土ヶ谷区常盤台 79 番1号

YNU編集委員長

山田 均(副学長/大学院環境情報研究院 教授)

編集・発行

横浜国立大学 総務部 広報・渉外室  
TEL. 045-339-3016 FAX. 045-339-3179 URL. www.ynu.ac.jp

アートディレクション

神里 僚子(経営学部卒業生)/株式会社リプログラム